

小笠原諸島のネコ対策 現在のステージ

佐々木哲朗（NPO法人 小笠原自然文化研究所）

東京都獣医師会の皆様、日頃より小笠原諸島のネコ対策に多大なるご協力を頂き、ありがとうございます。皆様のご支援により、小笠原では積極的な野生動物の保全活動を展開することができております。そして最近、世界でも稀に見る劇的な効果が現れてきました。これまで現地の状況を詳しくお伝えできずにおりましたが、本稿をスタートに、次号から連載記事「シリーズ 小笠原の自然とネコ対策」として、島での活動をレポートさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

近年の小笠原のネコ対策の契機は、2005年に母島南崎で起きた事件にあります。カツオドリ、オナガミズナギドリが繁殖する有人島最後の大型海鳥コロニーが、野生化したイエネコの捕食によって一時的に消滅したのです。また、絶滅が心配される小笠原固有のアカガシラカラスバトの減少に、野生化したネコが強く関与している事が解りました。これらの問題を解決するため、小笠原では自然環境行政（環境省・林野庁・東京都・小笠原村）と私達NPOが「小笠原ネコに関する連絡会議」を立ち上げ、東京都獣医師会を初めとする多くの関係者のご協力を得て対策にあたっております。

小笠原では、ネコ対策を“山域対策、と“集落対策、の2つの軸に整理して進めています。山域対策は、山で生活する野生化したネコを保護し、野生動物との接触を絶つことです。東京都獣医師会には、これまでに360頭を超える保護個体の受け入れと馴化を引き受けて頂きました。その結果、ネコが分布する3島のうち、弟島では保護が完了し、父島では残り10頭レベルで推移する低密度化

にまで漕ぎ着けました。集落対策は、新たな野生化ネコを生み出さないよう、飼いネコの不妊化と個体登録（マイクロチップ登録）を進める事です。2008年から毎年1回、東京都獣医師会の「小笠原どうぶつ医療派遣団」に来島頂き、父島と母島において診療を実施して頂きました。その結果、飼いネコの不妊化手術が完了し、現在は新規の飼いネコの対応のみ継続する段階に到達しました。小笠原は遂に、捨てネコが発生しない地域となったのです。

ネコ対策が進展するなか、野生動物に明らかな回復の兆しが見えたのは2012年の夏でした。一時は諸島全体で100羽以下と推定されたアカガシラカラスバトが、集落地域を含む海岸域に40羽以上が出現したのです。これは、小笠原が日本に返還される前から島に暮らす島民ですら、初めて目にする光景です。当研究所が調査したところ、出現したハトの多くは巣立ち後1年以内の若鳥であることが解りました。そして、この現象は昨年の夏季にも継続して見られました。ネコとハトの接触機会が減少した結果、ハトの繁殖成功率が急激に回復した結果であると私達は考えています。個体数が100個体レベルに減少した超絶滅危惧種が、保全活動によってこのような劇的な回復傾向を示した例は世界的にも非常に稀です。

残された課題は母島山域です。母島は小笠原諸島で最も森林の発達した島であり、アカガシラカラスバトにとって最も重要な生息地のひとつです。にもかかわらず、野生化したネコが多数残されており、保護捕獲はまだ道なかばの段階です。小笠原ネコに関する連絡会議は、母島での対策を

本格化し、この最後の難関に取り組んでゆきます。
アカガシラカラスバトは季節や食物の状況に合わせて島間を移動する鳥です。父島や他の島で巣立ったハトが、母島でネコに襲われる事故も日常的に起きていると考えられます。私達は、母島が安全な生息地となった時、アカガシラカラスバトの絶滅回避が確かなステージへ進むと考え、大きな目標としています。

これまでも支部長会や支部会等において、貴重なお時間を頂き、私達の取り組みをご報告させて頂いております。これからもできる限り多くの皆様にお伝えしたいと考えておりますので、支部会や勉強会などの計画がございましたら、ぜひお声掛け頂けないでしょうか。どうかよろしくお願いいたします。

〈連絡先〉

〒100-2101東京都小笠原村父島字宮之浜道

NPO法人小笠原自然文化研究所

TEL・FAX：04998-2-3779

E-mail：i-bo@ogasawara.or.jp

担当：佐々木哲朗

